

鯉の「鰓」と人の「肺」

鯉は強靱な生命力を持つ淡水魚です。錦鯉もまた、真鯉の血筋を濃く引くだけに、祖先と同じくらい体力的に強い魚と言えます。

錦鯉はさまざまな水域への適応力が高く、濁りの目立つ自然池の水にも、透明な庭の池泉の水にも、すぐに慣れてくれます。最も適応しやすい絶対的な水質があるはずですが、一方で非常に幅広い水質に順応できる淡水魚でもあります。

ところが、「鰓」を損傷させる水質の池水に入れると、鯉であれ、錦鯉であれ、ころりと死んでしまいます。たとえば、鯉は塩素に極端に弱いことでよく知られており、上水道水に含まれるわずかな残留塩素であっても、いちころで死んでしまいます。

なぜでしょうか？

魚の鰓は人の「肺」に相当する器官です。人の肺は周囲を肋骨と肋間筋から成る「胸郭」にぐるりと囲われて、下部には「横隔膜」が座布団状に敷かれて、その囲みの中に「肺」と「心臓」が組み込まれています。そして、肺は外部の「口」と「鼻」に対して「気管」を通してのみ繋がっています。

したがって、わずかばかりの皮膚呼吸を別にすれば、人はふだん口を閉じて、鼻だけで呼吸しているので、鼻の穴を塞がれると窒息死してしまいます。

つまり、胸部の中は完全な密閉空間になっているため、外界から襲ってくる病原菌などを撃退しやすくなっています。風邪ウイルスが流行っているとき、口と鼻にマスクを着けるのは外界の敵から肺を守るためです。

一方、鯉の呼吸器官である鰓は、鰓蓋の下に位置して、常に水と接触する場所にあります。ぶっちゃけて言えば、鰓は裸のまま外界にさらされていると言えます。呼吸機構が人の肺のように密閉状態になっていないので、水質の是非に生存および健康が大きく左右されるのです。

池とは囲われた水域で、言い換えれば、水の入れ替わりがない空間ですから、その中の鯉は水質の良し悪しに健康状態が影響されることになります。

若い錦鯉が育ちやすい野池の土の中には、餌になるヤゴのような昆虫類の幼生などがたくさんいて、目に見えないバクテリア類まで含めて、数多くの微小生物の種類が生息して、小宇宙を形成しており、こうした食物連鎖の行なわれている水域こそが魚類の生息に適する環境と言えます。

一方、池泉での錦鯉は、鑑賞目的で飼われているわけで、池水が透明であることが必須条件になりますが、濾過が過ぎると、水は澄んでいても、微生物が生息しない生命力の乏しい水域になりかねません。

鯉池は、水さえ澄んでいれば良しとするものではありません。鰓を健全に働かせることができて、決してこれを損傷させない水質が求められます。言い換えれば、鯉池において「透明かつ活力ある水」に作れば、錦鯉は長寿の遺伝子を持つ魚ですから、環境さえ整っていれば、愛鯉はいつまでも健康に育って、飼い主の日々の生活を癒してくれる楽しい趣味になります。



錦鯉の鰓(えら)は外界である水と常に接しているから、飼育水の環境が悪化すると病気になるやすい